



Title	19世紀パリ民衆史再考
Author(s)	木下, 賢一
Citation	駿台史學, 139: 127-140
URL	http://hdl.handle.net/10291/15940
Rights	
Issue Date	2010-03-26
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

【研究動向】

19世紀パリ民衆史再考

木下賢一

はじめに

19世紀パリ民衆史研究は、ルイ・シュヴァリエが一連の歴史人口学的研究によって基礎を据えて以来、長い間これを超えるような研究はなかった⁽¹⁾。

しかし、最近ラトクリフとパイエットの共著になる『都市に生きる——パリの民衆階級（19世紀前半）——』という刺激的な大著が公刊された⁽²⁾。表題からしてシュヴァリエの『労働階級と危険な階級——19世紀前半のパリ——』を意識しているのがわかるが、それだけにとどまらずシュヴァリエの研究を批判対象として正面に据え、その脱構築をめざすと宣言している。ラトクリフはすでに1991年以来、シュヴァリエを強く批判し⁽³⁾、またそれを裏付ける研究の一端を発表してきたが⁽⁴⁾、ここで一つのまとまりをもった作品として集大成された。

本書は、全編シュヴァリエの研究を意識し、それとの相違を強調しているが、その中心的論点は、19世紀前半のパリはシュヴァリエが主張するような決定的・例外的な時期ではなかったということ、また移住者のパリへの同化の過程を、シュヴァリエとは異なり、移住者の視点から明らかにしたことにある。

シュヴァリエから半世紀以上を経て登場したこの新しい研究の紹介と批判をふまえて、19世紀パリ民衆史について再考してみたい。

1. シュヴァリエ批判とその「脱構築」

本書は4部13章からなっており、第1部が「移住民と都市」、第2部が「周縁再考」、第3部が「生きられた空間」そして第4部が「態度と行為」と題されている。特に第2章は「支配的表象であるルイ・シュヴァリエのテーゼの脱構築」と題され、章全体がシュヴァリエ批判に費やされている。ラトクリフは、シュヴァリエの仕事を革新的だったと評価しながらも、それが勝ち得た独占がその後の研究の発展を阻害したと述べており⁽⁵⁾、19世紀パリ民衆史の研究が進展しなかったのは、シュヴァリエの影響だとまで断じている。ただ、シュヴァリエの『19世紀におけるパリ住民の形成』は高く評価しており、もっぱら『労働階級と危険な階級』に批

判を集中している。

第1部では、パリへの移住者がさまざまな角度から分析される。まず、すでに18世紀後半からパリへの移住者の流入は盛んであり、19世紀前半のパリはシュヴァリエが主張するような例外的な性格をもたないとする(pp.70-71)。人口調査が開始されるのは1801年からであり、それ以前のパリ人口は推定にすぎない。18世紀史家ロッシュが18世紀のパリ人口のさまざまな推定値を数え上げているが、それによると41万人から80万人という大きな開きがある⁽⁶⁾。彼は18世紀初めのパリ人口を50万人とし、18世紀中に最低30パーセント増加したと推定している⁽⁷⁾。そして、その実数を確定することは困難であるとしても、この人口の増加を支えたのは移住者であることは確かであるとしている⁽⁸⁾。そしてアンシアン・レジーム期のパリの移住民は、シュヴァリエの主張するようなマージナルな存在とはいえないとしている⁽⁹⁾。このようにロッシュはすでに19世紀前半のパリの例外的性格を否定していた。ただラトクリフは、シュヴァリエが『19世紀パリ住民の形成』では19世紀前半を例外的な扱いにしていないうし、『労働階級と危険な階級』以後の著作でも同様であることを指摘している(pp.54-55)。

しかし、18世紀に比べて19世紀のパリの人口増加の急激さは認めざるをえない。19世紀のパリの人口動態を分析するには、1860年に併合される郊外の地域の人口も考慮しなければならない。1860年以前にすでに旧市内は満杯になっており、増加は郊外に拡大していた。この併合地域を含めて考察すると、1836年には100万人を突破し、1856年には153万人を超え20年で1.5倍に増加している。その増加は18世紀に比べると急激であったことは確かである⁽¹⁰⁾。

ただこの点でも、ブローデルははやくから、この時期のパリの人口増加が同時期の外国の都市と比較して例外的とはいえないとし、19世紀前半にパリの人口が2倍になったとしても同じ時期にロンドンが3倍に増加したことを指摘している⁽¹¹⁾。このような人口の都市への集中は、産業化と都市化の時代である19世紀においてはむしろ一般的といえる。ウィーンやベルリンも同様である。

したがって、移住現象においても、人口の増加においても、ラトクリフの主張するように、19世紀前半のパリを例外的だとみなすことはできないだろう。ただ、シュヴァリエの主張する、パリのような大都市における人口の急増と貧困の増大そして都市の不適応をもたらす問題そのものは依然として残っている。その増加を支えていたのは移住者であり、少なくとも人口増加の割合と実数の点で、19世紀のパリは18世紀とは次元の異なる規模であり、単純に18世紀の延長上にあるとみなすことはできない。

それは次のこととも関連している。すなわち、この民衆の多くが貧民であったのであり、18世紀においても貧民が多かったとしても、19世紀前半のパリ民衆の貧困の規模はやはり尋常ではない。例えば、18世紀のパリについてロッシュは次のように述べている。「要するに、フランス革命前のパリにおいて、住民の7分の1近くが明日を保証されていなかった」⁽¹²⁾。他方、

19世紀前半ではどうであっただろうか。ラトクリフは貧困の度合いを計るために、まず貧民と貧窮者を定義しているが、その際当時のある慈善家が認めている次の単純な区別を受け入れる。すなわち、「貧民 pauvre とは、生きるために自分の腕しかもっていないのにたいし、貧窮者 indigent とは生きるための糧をもたない者である」(p. 171)。そして、ラトクリフは、パリ全住民の 2/3 が貧民といえるとしている (p. 179)。さらに、貧窮者の割合として次のように結論している。「現在まで歴史家に知られている限りの史料を渉猟した結果、次のことがほぼ確実だといえる。すなわち、19世紀前半において、通常パリ住民の約 30 パーセントが貧窮状態にある、と」(p. 178)。貧窮者の割合の推定はシュヴァリエもラトクリフも変わらない。この貧民と貧窮者の割合はやはり 18世紀の延長線上にあるとはいえないだろう。ラトクリフは民衆の貧困の拡大を認めるが、それは人口上の量的な問題であって、構造的な変化ではないとしている。しかし、シュヴァリエが言うように、これは「けた外れの構造的貧困であり、根本的な貧困」⁽¹³⁾と捉えるべきであり、18世紀の単純な延長上におくべきではない。

これらの事実をふまえて、シュヴァリエはこの時期のパリが病理的状态にあるとみなし、それと犯罪の多発、その変質、そして犯罪に関する言説の氾濫を結びつけるのであるが、ラトクリフはこの時期のパリが病理的状态にあることを否定する。病理的状态はたとえ存在したとしても、それは一部であって、それが都市全体を覆っているのではないとする。そして、民衆の側から見れば、当時のパリが病理的状态ではないことを明らかにすることが、まさに本書の主要テーマとなっている。

さらにその後の都市研究や移民研究の深化とその成果をふまえて、シュヴァリエのテーゼを批判していく。移住の流れと構造はシュヴァリエが考えていたよりはるかに複雑であり、循環的、連鎖的、永住的また地域的な移住のタイプがあることを指摘している。また、都市における移住者の経験についての理解が不十分であること、私生児や自殺あるいは犯罪に関する統計に基づいた民衆の行為の解釈や説明には現在の研究水準では問題があること。環境決定主義的な主張、移住者のパリへの同化の分析において文学的資料やある種の統計しか利用していないこと。還元主義的で民衆を受動的要素として扱っているが、現代の研究では、都市のネットワークがもつ同化力や労働、近隣関係、友人、親戚、消費、余暇によって生み出される多様な連帯が重視されていることが指摘されている。しかし、「彼(シュヴァリエ)は、移住者やパリの民衆階級のあいだの連帯や文化をまったく分析しておらず、結果としてこの現実を無視している」(p. 77)⁽¹⁴⁾。また、シュヴァリエは物理的な空間と生きられた空間に相関関係を想定している⁽¹⁵⁾。さらに、社会学者と民俗学者そして歴史家は、移住者の集団の適応能力、彼らが非常に困難な状況にあってもそれまでの価値システムを維持すること、社会の理解のためには日常生活の研究——ソシアビリティ、儀礼、抵抗、相互作用——が重要であることを理解するようになっており、彼の研究はすでに古くなっている、としている (pp. 68-85)。

このようなシュヴァリエに対する批判が出てくるのは、彼の提示する表象が社会的エリートのものであると決めつけることからきている。ラトクリフはシュヴァリエの問題点として、次のように断じている。「シュヴァリエの研究の主要な問題点の一つは、当時の人がパリの労働者を未開人や野蛮人と同一視していたことを、彼が受け入れていることである」⁽¹⁶⁾。しかし、これはシュヴァリエの言葉を文字通り取りすぎているだろうか。未開人や野蛮人には文字通りの意味と、文明人（ブルジョワ）に対する批判のイメージも込められていると思うのは考えすぎだろうか。それはともかく、シュヴァリエが主張しているのは、ブルジョワが民衆を野蛮人とみなしていたことは、それがイデオロギー的な見方であろうとなかろうと、それ自体が一つの事実なのであって、民衆はその事実に対して反応したのだということを言っているのである。シュヴァリエ自身がブルジョワの意見に同意しているかどうかはさしあたり問題ではない。

2. ラトクリフの貢献⁽¹⁷⁾

本書が19世紀パリ民衆史研究にもたらした貢献を、その研究方法と成果において検討してみよう。著者たちは、先行の人口学的研究、社会階級の分析や社会史研究、18世紀のパリ史研究、パリ以外の都市史研究の蓄積、さらに英米の現代都市史研究における社会学的・人類学的・文化史的方法をふまえて、新たな視点から19世紀パリの社会集団に検討を加えているが、ラトクリフが強調するのは、シュヴァリエが当時の支配層の視点から民衆を捉えているのに対し、自分たちは民衆の視点から捉えようとしているのだということであり、また、対象をより長期的な時間（18世紀から19世紀後半まで）で捉えていることである。

シュヴァリエ以後の研究を総合して、ラトクリフは18世紀末にはパリ生まれの成人はすでに1/3になっており、パリ全住民における移住民の割合は、18世紀末から19世紀末まで60パーセントをわずかに上下するだけで一定していることを明らかにしている。パリ生まれではない成人の割合は、1820年には60から65パーセントの間にあり、王政復古期と七月王政期に増加し、1850年には約70パーセントに達したと推定している。これは、シュヴァリエの主張するような19世紀前半の構造的変化を証明しているとはいえないにしても、この時期における移住者の流入の急増を示しているといえるだろう。またパリのブルジョワの半分はパリ生まれではなく、移住現象が民衆だけに限られたものではないことも明らかにしている。さらに地方都市出身者が多いことは、直接農村からパリへ移住してくるのではないことを示している。移住民はパリであらゆる職種についているが、女性の仕事は限られていた。パリ生まれと移住者の関係では、1820年、1835年そして1850年の結婚の少なくとも1/3はパリ生まれと移住者の間でおこなわれており、これは移住者がパリ社会に同化していることを示している（pp. 96-110）。

女性家事使用人

19世紀パリ民衆史研究に対する本書の貢献の一つは、これまでほとんど明らかにされてこなかった民衆女性史に光を当て、豊かな成果をえたことである。特に女性家事使用人⁽¹⁸⁾と高齢女性に関する部分は秀逸である。

フランス革命以来、貴族に雇用される家事使用人が減少し、男性の仕事としての価値が下落した。また労働市場で他の可能性が増えたこともあり、19世紀初めから家事使用人の女性化が起り、女性の労働市場の大きな部分を構成するようになった (p. 147-148)。主人が貴族からブルジョワになったということであろう。

19世紀には女性の労働市場が発展したが、家事使用人はそこでかなり特殊な位置を占めていた。1856年時点で女性労働市場の1/3は家事使用人からなっており、パリの成人女性8人に1人を占めていた。彼女たちは、1831年には36,258人だったが、特に1840年代以後急増し、1856年には64,756人になっている。これは七月王政期のブルジョワ社会の発展を側面から示しているのであろうか？ 彼女たちの特徴は、他の職業と比べて地方出身者の比率が非常に高いことで、約95パーセントが地方出身者である。19世紀においては、フランス女性の4人に1人は人生のある時期を家事使用人として働いた経験をもっていた。これはフランスの民衆女性の人生において、この職業がもつ重要性を示しているといえるだろう (pp. 105-132)。

当時、女性家事使用人は道徳的に良くない評判があったが、ラトクリフは、新しい史料によって彼女たちの実態を再構築し、評判が真実であったどうかを明らかにしていく。捨て子に関しては、地方の家事使用人が妊娠の事実を隠すために、しばしばパリに来て生み捨てる場合があったとしている。女性犯罪者に関する史料では、逮捕の理由として浮浪や乞食によるものが多く、26パーセントを占めていた (1861年)。盗みは彼女たちの犯罪のなかでは最も多いが、それでもこの職業従事者全体からするとわずかなものであること、また嬰兒殺しや墮胎、売春、精神病と自殺においては彼女たちの占める割合が特に高いということはないとしている (pp. 136-145)。

また、パリ貯蓄銀行の預金者の分析で、彼女たちのうち1846年で57パーセント、1856年で54パーセントが口座をもっていたことを明らかにしている。彼女たちの貯蓄の主要な目的の一つは、結婚するための持参金をつくることであった。彼女たちの大部分は、家事使用人としての仕事を永続的な仕事として考えているのではなく、結婚への一つの跳躍台とみなしていた (pp. 151-153)。

一般的に女性家事使用人は悲惨な状況にあったが、マージナルな集団ではなかったこと、彼女たちの4/5は貧窮状態をまぬかれており、規則的な生活を送っていたことを明らかにしている。小さな犯罪を犯す者はいたが、常習的な犯罪集団に加わったりする者はほとんどいなかった。彼女たちに対する悪い評判は、新聞による犯罪の過大報道とブルジョワの恐怖感に由来し

ていると結論している (pp. 162-163)。

老齡女性

第2部は「周縁再考」と題され、これまで周縁的存在と見られてきた民衆を見直して、新たに社会のなかに位置づけている。ここで取り上げられている対象として、特に老齡女性と屑拾いについての詳細な分析が興味深い。

当時の社会においては、女性は50歳をもって老齡化の始まりとみなされていた。1851年時点で51歳以上で、一人暮らしの女性は60パーセント、男性は30パーセントである。60歳以上では、70パーセントの女性が一人暮らしで、70歳以上では85パーセントにはね上がる。全国の一入暮らしの老齡者(51歳以上)の割合(1851年)は、男性が27パーセントで女性が46パーセントであり、全国と比較してパリの一人暮らしの老齡女性の割合が高い(pp. 228-232)。

老齡の女性が一人で生きていくことは、賃金が男性の半分という状況ではほとんど不可能であった。ラトクリフは、老齡女性のおかれた厳しい貧困の状況を数量的にはじめて明らかにしている。さらに彼女たちは(少なくとも公的には)無視された存在であった。というのも、老齡女性は人口の10パーセントを占めていたにもかかわらず、当時の文献には彼女たちに関する記述がほとんどないからである。たとえば、貧窮者の2/3は女性であったが、公的救済担当の行政官は彼女たちになんら特別の注意をはらっていない(pp. 233-240)。

しかし、「他者の目から見ても、他者との関係を通して、……これらの女性は排除された者と呼ぶことはできないし、周縁にある者と呼ぶことさえできないように思われる。弱者という概念が彼女たちの悲惨な状況を最もよく表しているようにみえる」。彼女たちは最も悲惨な状況におかれていたが、けっして孤立していたのではなく、地域社会と結びついて生活していた。「彼女たちは力のゆるす限り、たとえ最も不安定な形であろうと、労働市場にとどまった。いわゆる〈正規の〉労働市場に加わるにはあまりに弱くなっていたので、自宅でささやかな縫い物の仕事をしたり、街路の片隅で駄菓子を売ったり、小さな子どもや病人の面倒を見ることによって、アパートの同じ階の隣人や家族をさりげなく手助けしていた」。また、子供や同じ老齡女性と同居することもあった(pp. 248-250)。

屑屋

屑屋は民衆にとって不可欠であった。例えば、民衆は普通古着を身につけていたが、「民衆にとって、ブルジョワの古着を着ることは、体面と同化のしるしを表していた。なぜなら、これは公的空間におけるある種の儀式やあるいは特別なできごとに参加するための一つの前提条件であったからである」(p. 273)。

当時の都市経済と民衆階級の生活においては、公式経済とともに、路上の小商いや屑屋(リ

サイクル業)のような非公式経済が重要で、それらは公式経済にも浸透していた。また、少なくともある人数の人びとが非公式経済から公式経済へ移行していった。この経済の二重性は、19世紀前半のパリを理解するための道具として必要である (p. 275)⁽¹⁹⁾。

1856年時点で、少なくとも1万人(この仕事に依存している者はもっと多い)が直接この商いに携わっていた。彼らが、孤立していたのでも、受動的でもなかったこと、またそれ以上に重要なことは、彼らが今日では社会的資本と呼ばれているようなネットワークと連帯を享受していたことを明らかにしている (pp. 278-289)。

社会的エリートの言説が生み出した屑屋のイメージは、エリート自身について語っているとしても、対象を明らかにしているわけではない。「他の民衆階級と同じように、屑屋は危険で周縁的な存在というよりも自立的で人に危害を加えない存在であると結論できる」。それだけでなく、彼らを当時のパリ経済のなかに次のように位置づけている。「われわれは、都市生活の経済的、社会的そして文化的周縁にあると見なされていた屑屋を、都市を構成する一つの要素をなしているとみなした。彼らの存在は、失業と貧困を生み出す構造的かつ変動的力の重要性と同じように、19世紀パリにおける非公式経済とリサイクルの重要性をわれわれに思い起こさせる。同様に、生き残り戦略と自分たち固有の生活を制御する民衆階級の多くの者の能力の重要性もまた思い起こさせるのである」(pp. 296-297)。

カルチエ

第3部は「生きられた空間」と題されており、当時の民衆にとっての日常生活の場であるカルチエをさまざまな角度から分析している。カルチエを日常生活の枠組みとしてとらえるのは、次のような理由による。「カルチエは、しばしば都市のなかの村にたとえられるが、社会的な凝集力を生み出す安定した個人間の関係をもたらし強固にすることを可能にする優れた枠組みと見なされている」からである。しかし、カルチエを閉じられた共同体としてではなく、外に開かれたものと見る必要があるとも指摘している (pp. 304-305)⁽²⁰⁾。

カルチエの分析において、各々特徴のある6つのカルチエを取り上げて詳細に分析している。貴族的なカルチエであるフォブール・サン・ジェルマン、ブルジョワ的なカルチエのショッセ・ダンタン、家具職人を中心とする職人的なカルチエであるフォブール・サンタントワヌ、左岸の皮革産業の中心であるサン・マルセル、ガルニ(家具付き安宿)の集中する労働者の多いパリ中心部のカルチエであるオテル・ド・ヴィル、そして民衆的要素が支配的であるが、社会的には混合しているカルチエであるフォブール・サン・ドニである。

一般的にいえることは、大半の者がパリにおいて親戚と友人のネットワークをもっていることで、これは都市の孤立した移住者という神話を否定するものであるとしている。また、カルチエを越えて都市全体へ広がるネットワークが多くみられるが、これは住民の地理的流動性と

都市生活への適応を表しているともなしている (p. 318)。

しかし、社会階級ごとに相違がみられる。社会的エリートの人びとにとっては、友人は居住しているカルチエに限定されないのに対して、民衆階級では住んでいるカルチエでの友人関係が多い。もっともそれは比較としてであって、他の地域に対して閉鎖的ということはない。さらに結婚相手の選択において社会集団の間の態度の相違は最大になる。民衆階級の3/4近くが結婚相手を同じカルチエで見つけるのに対して、社会的エリートの人びとの場合は2/5のみである (pp. 322-323)。

カルチエの性格を決定しているものとして次のように述べている。「社会構成、都市における機能そして居住タイプが、密接に絡み合い、相互に強めあって、あるカルチエにその性格とまとまりを与えている。そこで展開される個人間の関係は明らかにそれらに強く支配されている」(p. 326)。

移住民はすべてのカルチエで住民の大半を構成していたが、彼らが地域の社会関係に与えた影響を計ることは史的には難しいとしている。また、移住者にとって、カルチエの日常生活のなかで、酒場はソシアビリテと都市の決まりを身につける場であり、新参者の同化において大きな役割を果たした (pp. 327-329)。

6つのカルチエのなかで独立の章を立てて分析されているのが、フォブル・サン・ドニである。当時の証言は、このカルチエを小商いの王国と呼んでいるが、このカルチエの商工業従事者数はそれを裏書きしている。このカルチエでは、小ブルジョワと労働者の関係が密接であり、「商店主が一般に小ブルジョワジーに属しており、労働者や職人が民衆階級に属している」とみなされているとしても、これらの多くのつながりは、社会的には一方のカテゴリーの上層部がもう一方のその下層部からそれほど離れていないことをよく示している」と述べている (pp. 351-362)。

このカルチエでは、結婚相手が同じカルチエに住んでいる者同士である割合は49パーセントに達しており、その36パーセントは同じ通りの住人であり、大部分は500メートル以内に住んでいた。少なくともフォブル・サン・ドニでの結婚相手との出会いは、居住地の近くというのが支配的である。他方、友人の大半はカルチエの外から来ており、都市空間全体への同化も示している (pp. 363-366)。

また、カルチエのなかに、さまざまなネットワークをつくり出す核になるような人びとの存在が認められる。それは有権者の資格をもつ名望家であるとか、かなり以前からカルチエに定着している商工業者である (p. 367)。

しかし、結局、若干の相違はみられるものの、住民の行為はどこでもよく似ておりカルチエの独自性はあまり見られない。したがって、限定をつけた上で、カルチエが帰属意識を生み出す場として歴史分析に使用できる、としている。特に民衆の場合は関係がより狭い空間に集中

しているのもより有効である (pp. 369-371)。

最後に、都市改造で取り壊されることになるスラム街を取り上げている。それは、モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴの北斜面のスラム街である。

ここでもやはり酒場は地域の民衆の日常生活の核をなしていた。酒場は単に飲み物と食事あるいは宿を提供していただけではなかった。彼らは出生証明書や死亡証明書を必要とするときに、戸籍係りの役人への仲介者になったし、さらに将来の夫婦は彼らを結婚に際しての証人として選んだ。カルチエの小教区教会で式を挙げた夫婦の1/4は彼らの証人のなかに少なくとも一人の酒場の主人を数えていた。また、そこで仕事の情報を得たり、困っているときには支払いをつけにしてもらったり、同じ職業や出身地の者の集会がおこなわれた (pp. 396-397)。

この地域の6つの通りの詳細な分析の結論として、ここが経済活動の活発な地域であり、けっして荒廃した地域ではなかったこと、またこの地域でも人びとにとってのネットワークの重要性が指摘されている。この地区で1861-1865年に亡くなった人のうち病院で亡くなった者は5人中1人だけであった。……その他の者は自宅で最後を迎えることを選んでいる (pp. 397-406)。

また、この地域はヘッセンからの出稼ぎの移住者が集まっていた。彼らは日雇いや道路清掃という社会の底辺を形成していたが、当時の社会的エリートがもっていたイメージとは異なり、彼らは救済や犯罪また自殺などとは無縁であった。その理由として彼らが永住を目的としていなかったことと、生き残りのためのネットワークが存在していたことを明らかにしている (pp. 408-416)。

同 棲

第4部は、「態度と行為」と題され、同棲、宗教、自殺が取り上げられている。まず民衆の間に広くおこなわれていた同棲であるが、19世紀半ばにパリの夫婦のうち1/3が同棲していたと結論している。シュヴァリエは同棲が子どもを法すれすれの状態におき、やがて彼らの何人かを法に対する反抗へと追いやる⁽²¹⁾と述べているが、このような推論は、民衆のおかれた状況を犯罪に安易に結びつけており、ラトクリフの批判を借りるまでもなく受け入れることはできない。

ラトクリフは、民衆はきちんと教会で結婚式を挙げ、自分たちの子どもを認知することを強く願っていたし、愛情関係における、また結婚に対する民衆階級の態度は、おそらくわれわれが思っているよりも伝統的で順応主義的であったと結論している (pp. 444-463)。

宗 教

民衆の宗教との関わりを、結婚における教会との関係を通して分析している。宗教的感情の

衰退はすでに 18 世紀には始まっていた。しかし、教会に対する抵抗の先兵をなしていたと思われた職人が、結婚に際しては教会の規範を最も尊重していた。また、民衆階級は全体としては、たとえ非常にしばしば結婚のミサを拒否したとしても、儀式の象徴主義のなかに教会を信じ続けていたし（結婚の 9 割において市民の儀式に続いて教会での儀式がとりおこなわれた）、彼らがこのような場にあわせてきちんとした衣装を着ることに特別の重要性を与えていたことが知られている。

他方、子どもの洗礼という行為のなかに、民衆と宗教の関わりを分析している。19 世紀中葉において、10 人中 9 人の子どもが洗礼を受けている。宗教的感情をよく示すのは、誕生後どのくらいで洗礼を受けたかということにあるとし、この点からすると、19 世紀半ばに宗教的感情に変化が生じている。しかし、その衰退が非常に明確になるのは世紀の終わりになってからである。「19 世紀中に、社会的エリートと民衆階級の態度の間で徐々に逆転が起こった。社会的エリートは、1820 年代には教会の教えに最も忠実でなかったが、1880 年代に最も忠実になった。民衆階級の場合は逆であった。しかし、ここでもまたこの逆転は漸進的なものであり、特に世紀中葉以後に生じた」（pp. 482-489）。

自殺

パリの自殺の増加率は人口増に比例しておらず、また全国の増加率より低い。1836-1857 年の間にパリの自殺は 48.3 パーセント増加しているが、フランス全体（セーヌ県を除く）は 60.2 パーセント増加している。また、1847 年の不況期に、首都における自殺数は 1/4 増加し、全国の総数の 19 パーセントを占め、この時期（1836-1857 年）で最も高い割合を示した。さらに注目すべきはおそらく女性が男性よりもより増加率が高かったという事実である。女性の自殺数は前の 5 年間の平均に対して 39 パーセント増加した」。経済危機と自殺の増加の関係は明瞭である。逆に 1848 年には自殺は 1836-1857 年のなかで男女とも最も低くなることを指摘した後、次のように付け加えている。「この大きな減少は、首都における政治危機がもつ重みと統合的な影響力を反映している」（pp. 507-509）。

一般に歳とともに自殺率が高くなるが、パリでは 40~60 歳が最も高い。男性が自殺者の 71 パーセントを占める。全国の女性の自殺のなかでパリの女性は 20.2 パーセント、男性は全国の 16.5 パーセントを占める。寡夫が最も自殺が多い。自殺者の出身地をみると、パリ生まれに比べて地方出身者の割合が高いということはない。モルグの統計でも、セーヌ県あるいはパリ盆地出身者は、27 パーセントに達している。外国人の自殺者数は彼らがセーヌ県人口に占める割合の 2 倍になっている。周縁のんびりの自殺者の割合が高いということはなく、産業労働者や娼婦の自殺も少ない。自殺率の最も高いグループは、家事使用人と退職した兵士であるが、彼らの自殺には都市環境以外の要素が大きいとしている（pp. 510-517）。

自殺の原因の大部分は経済的な困窮にあり、自殺が社会的病理の兆候とはいええない。都市化が自殺に影響したということを書き残す証拠はみられない。パリ周辺の諸県でも自殺率が高いが、周辺の諸県には大都市はない。これは自殺が都市的環境と関係が少ないことを意味していると結論している。しかし、これはこの地域の自殺の原因がパリとは異なることを示しているだけかもしれない、パリの自殺が都市環境と関係ないことを示す証拠にはならないと思われる。死亡数全体における自殺数の割合は小さく、セーヌ県で、1836-1857年に、自殺者数は全死亡者の1.4パーセントを占めるにすぎない (pp. 522-524)。

最後に、モルグにもたらされた死体の90パーセント近くが身元を確認されたということは、これらの自殺者は生前において孤立していたのではなく、新しい移住者であっても、家族や同郷の者、労働仲間、近隣の人びとによって形成されたネットワークのなかに統合されていたことを示している、と結論している (p. 525)。

3. ラトクリフ批判

ラトクリフのシュヴァリエ批判の根底にあるのは、シュヴァリエが当時の社会的エリートの思想の延長上にあるという点にある。しかし、シュヴァリエの視点はラトクリフのこのような社会的エリートの視点だとは言い切れない。彼が19世紀前半のパリ民衆の独自の性格を強調した背景には、この時期のパリ民衆の例外的な性格を明らかにしようとする志向があった。すなわち、フランス革命、七月革命、二月革命そしてパリ・コミューンを生み出した19世紀パリ民衆の独自性を明らかにすることが、少なくとも彼の問題意識としてあった。この独自性は、ミシュレやユゴーによって創造された伝説的パリ民衆像によって説明されてきたが、このような神話の果たす役割は大きいとしても、パリ民衆に神話性を超えて具体性を与えることが必要であり、それが可能なのが歴史人口学なのだと言っている⁽²²⁾。それゆえ、シュヴァリエが当時の社会的エリートの著作から多くを引用しているとしても、彼らの思想の流れを受け継いでいるとはいえないだろう。彼が民衆の暴力や犯罪を取り上げているのも、民衆をそのような状況に追い込んだ条件を統計によって客観的に明らかにしようとしたのだといえる。そのため外からの視点になっているが、これはこの著作が書かれた時代の科学的志向を示しているのであって、社会的エリートの視点と同じであることを意味するのではない。

ラトクリフの研究は、19世紀前半のパリ民衆の世界について多くの知見をもたらしただけでなく、特に『労働階級と危険な階級』で提示されたパリ民衆の世界のイメージを大きく修正した。シュヴァリエのパリ民衆は貧困の淵に沈んでいったが、ラトクリフのパリ民衆は貧困の淵にあっても、明るいとまではいかないが、ネットワークと連帯によって逞しく生きる姿を見せている。それらの事実を具体的に明らかにしていくこと自体は重要なことであるが、しかし、それは困難な状況におかれた人びとが生き残っていくために、ある意味では、いつの時代でも

どこの地域でもしばしばみられたことであると、いえなくもない。19世紀のパリ民衆とは、ヨーロッパの諸革命の震源地であったパリの民衆でもあった事実を視野に入れる必要がある。それは民衆と政治・社会運動を含む政治文化との関係を問うことであり、当然それは民衆の生活の一部をなしていた⁽²³⁾。

上のこととも関連しているが、本書には権力の問題が欠如している。民衆も権力の網の目のなかで生きている以上、権力のつくり出している統治構造を無視した民衆の日常生活史も文化史もありえないだろう⁽²⁴⁾。

また、本書は民衆を評価するために民衆のある側面を無視している。民衆と暴力の問題がその一つである。民衆の間の暴力といわれるものは、ブルジョワの一方的な見方であって、それはしばしば一種の儀礼であるといわれるが、それだけに回収してしまふことはできない。例えば、暴力に対する崇拜やグレーヴ広場での公開処刑見物に対する熱狂なども、民衆の文化との関係で分析する必要がある⁽²⁵⁾。

ラトクリフは、特にカルチエでの民衆の日常生活を分析するために、家族会議記録、小教区の結婚記録簿、小教区の洗礼記録簿などの新しい史料を駆使しているが、これらの史料は、地域に定着した民衆に関するものであり、民衆階級のなかでも上層部分に関するものだといえる。そういう意味では、地域の日常生活の枠を形成していた民衆ともいえるが、これらの史料で、カルチエの新しい移住者や流動的な人びとを捉えることは難しいと思われる。定着している民衆と移住者の関係は本書では十分明らかになっていない。また、日常における民衆のネットワークと上に述べた政治・社会運動との関係なども明らかにする必要があろう。

おわりに

民衆史は民衆の視点から捉える必要があるのは当然であるが、しかし、民衆、それも無名の民衆の歴史を明らかにすることは可能であろうか。個々の民衆の生というのは、ある観点からすると平凡で画一的であるとしても、多様かつ深遠であって一般化できるようなものではない。われわれ、少なくともわたしに可能だと思えることは、ある時代のある社会に生きる民衆のおかれた状況を、可能な限り客観的に明らかにし、その上である集団の傾向あるいは個人の考えや態度を理解することである。この場合状況というのは、ネットワークやソシアビリティや民衆文化そして遍在する権力をも含むだろう。

19世紀パリ民衆史研究は、シュヴァリエの歴史人口学によってその基礎を据えられたことから、数量化が一つの重要な要素になった。数量化によって、それまで未知の多くの事実が明白になったことは確かである。シュヴァリエを脱構築しようとしたラトクリフも、新しい視点と史料に基づく数量化によってこれを批判しようとした。しかし、その過程で数量化による研究そのものの限界にぶつかっている。

例えばラトクリフは次のように述べている。「しばしば、われわれはそれを認めざるをえないのだが、われわれが提起している結論に達したのは、明確な証言によってというよりも論理的な演繹によってであるという意味で、その証拠は、法律家の言葉で言う状況証拠にあたるものである」(p. 369)。あるいはまた、次のように一般的方法の問題としても述べている。「統計は記述的であり、行為のモデルを引き出すことができるが、それを説明することはできない。そうするためには、われわれは演繹によらざるをえない。それが1960年代の人口学者から学んだ教訓である。彼らは小教区簿冊を丹念に精査することによって、ヨーロッパ近代に特有な人口システムの驚くべき存在を明らかにすることができることを示したのであるが、しかしそれを説明することはできなかったのである」(p. 471)。あるいは、シュヴァリエ自身が『労働階級と危険な階級』以後の著書でほとんど統計を使っていないだけでなく、次のように統計の限界を指摘していることを、ラトクリフが引用している。「統計はすべてを総計するが、しかし本質的な事実には達しない。本質的な事実は人と人との接触から生まれる」(p. 343)。

ネットワークやソシアビリティや民衆文化あるいは権力は、数量化できる部分はあるとしても、その多くは数量化できない以上、別の方法が必要であろう。ただ、数量化できる要素は可能な限りそうすべきであるし、そうすることによって説明をするためのモデルをより明確化し、また隠された問題を発見することが可能となるとだろう。

註

- (1) 特に次の二著、Louis Chevalier, *La formation de la population parisienne au XIX^e siècle*, Presses universitaires, 1950. Louis Chevalier, *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX^e siècle*, Plon, 1958 (ルイ・シュヴァリエ著、喜安朗・木下賢一・相良匡俊訳『労働階級と危険な階級 — 19世紀前半のパリ —』みすず書房、1993)。この二著については、民衆運動研究の観点からその意義を論じたことがある。木下賢一「19世紀パリ民衆の世界 — ルイ・シュヴァリエの歴史人口学的研究を中心に —」『駿台史学』第59号、1983。
- (2) Barrie M. Ratcliffe et Christine Piette, *Vivre la ville. Les classes populaires à Paris (ère moitié du XIX^e siècle)*, La Boutique de l'Histoire éditions, 2007.
- (3) Barrie M. Ratcliffe, "Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX^e siècle?: The Chevalier Thesis Reexamined", dans *French Historical Studies*, Volume 17, No. 2, 1991.
- (4) Christine Piette et Barrie M. Ratcliffe, "Les migrants et la ville: un nouveau regard sur le Paris de la première moitié du XIX^e siècle", dans *Annales de démographie historique* 1993.
- (5) Barrie M. Ratcliffe et Christine Piette, *Vivre la ville*, p. 86. 以後、煩瑣になるので、本書からの引用は本文のなかに括弧内のページ数で示す。また、同様の理由により著者も便宜的にラトクリフで代表させたい。
- (6) Daniel Roche, *Le Peuple de Paris*, Aubier Montaigne, 1981, p. 21.
- (7) *Ibid.*, p. 22.
- (8) *Ibid.*, pp. 22-23.
- (9) *Ibid.*, pp. 19-20.
- (10) L. Chevalier, *La formation ...*, p. 284.

- (11) Fernand Braudel, "Louis Chevalier: Pour une histoire biologique", dans *Annales*, 15^e année, no. 3, 1960, p. 522.
- (12) Roche, *op. cit.*, p. 58.
- (13) L. Chevalier, *Classes laborieuses* ..., p. 445.
- (14) これはまったくの誤解だろう。シュヴァリエは、詩やシャンソンや小説そして特に芝居のような民衆文化の重要性を指摘し、これらの意味を解き明かさずして民衆の心性を捉えることはできないとしている。それは民衆にとって文化というよりも文明であるとまで言い切っている。Chevalier, *Classes laborieuses* ..., pp. 506-507.
- (15) しかし、シュヴァリエは、アルプヴァクスを引用して場と記憶の問題を論じており、それほど単純に物理的空間と生きられた空間を結びつけているわけではない。Chevalier, *Classes laborieuses* ..., pp. 368-369.
- (16) Ratcliffe, *Classes laborieuses* ..., p. 569.
- (17) この章は、Ratcliffe et Piette, *Vivre la ville...* の内容の紹介が中心になるが、煩鎖を避けるために各段落の末尾に参照した本書のページをまとめて記した。
- (18) 18世紀の家事使用人に関しては、Roche, *op. cit.* 参照。
- (19) シュヴァリエは、この時期のパリの経済構造がパリ内消費市場に依存していたことを明らかにしている。Chevalier, *La Formation* ..., pp. 105-107 参照。
- (20) カルチエでの民衆の日常生活に関しては、18世紀のパリ民衆の世界における近隣関係を明らかにした David Garrioch, *Neighbourhood and Community in Paris, 1740-1790*, Cambridge University Press, 1986 が示唆に富む。
- (21) Chevalier, *Classes laborieuses* ..., pp. 380-381.
- (22) Chevalier, *La Formation* ..., pp. 12-14.
- (23) 酒場における人的結合関係（今でいうソシアビリテ）のなかに民衆運動生成の契機を探った次の拙稿を参照。木下賢一「パリ・コムニオン前夜の民衆運動——『労働の世界』と運動——」『社会運動史』No. 1, 1972. と特に同著者「第二帝制下におけるパリの労働者階級について」『社会運動史』No. 5, 1975. また、同著者「第二帝制末期のパリの公開集会（1868-1870）」『史学雑誌』第 86 編第 7 号, 1977.
- (24) この点で、喜安朗『パリ——都市統治の近代——』岩波書店, 2009 は多くの示唆に富む。
- (25) シュヴァリエは、存在を認められていなかった労働者にとって、暴力は自己主張の一つの手段であったとしている。Chevalier, *Classes laborieuses* ..., p. 533.